

西川 フランクルさんとは今日、初めてお会いするという気が
しません。というのも、このところずっとフランクルさんの
2冊の著作を読んでいたからです。ひとつは『世界青春放浪
記』という本。生まれてこのかた、日本に来るまでの話を書
かれたもの。もう一冊は『僕が日本を選んだ理由』。どちら
の本も非常に面白かったし、フランクルさんがいろいろなア
イデンティティを持つておられることがわかりました。まず
ハンガリー人であること。フランスに亡命してフランス国籍
をとったこと。EU（欧州連合）市民であること。そしても
うひとつは、ユダヤ人であるということ。この四つのアイデ
ンティティのなかで、どのアイデンティティを一番強く感じ
ておられますか。

フランクル それは、自分がいる場所によると思います。例え
ば日本では、自分のことを何よりもEU市民だと感じていま
す。1988年から日本に定住していますが、全国47都道府
県すべてに10回以上、講演会などで行っています。日本中を
旅してみても、まだ日本はヨーロッパから学ぶものがあると思
います。

西川 欧州に帰ると、どうなるのでしょうか。
フランクル 最近ほヨーロッパに行くとき、自分がユダヤ人だと
意識させられることが多くなりました。自分がそう考えた
いからではなくて、反ユダヤ主義の風潮からです。イスラエル
とアラブの問題が背景にあると思いますが、いまヨーロッ
パでは反ユダヤ主義が強くなっている、と肌で感じています。

学者を輩出したハンガリー教育

西川 では、ハンガリー人だと意識するときは、どういうとき



日本とEU（欧州連合）は、2005年を「日
本・EU市民交流年」として、人と人との交
流、相互の社会について理解を深めることを
目的に、教育、科学技術、芸術、政治、経済、
スポーツなどの多岐にわたる分野でイベント
を開催することを予定しています。

国際交流基金（ジャパンファウンデーション）は、この市民交流年が今後の長期的な交
流の契機となることを期待して、市民交流セ
ミナー「日本とEUの新たな出会い」を今年
7月1日に開催しました。

ここでは、このセミナーから、ピーター・
フランクルさんと西川恵さんの対談を引用し
て、数学者で大道芸人でもあるフランクルさ
んの「わくわく交流術」を紹介します。

国際交流基金フォーラム

対談

2004年7月1日

撮影 関暁

日本・EU市民交流

J
A
P
EUROPEAN
UNION
2005

「脱米入欧」のすすめ

ピーター・フランクル

Peter Frankl

西川 恵

にしかわ めぐみ

ですか。

フランクル 例えばいま、NHK教育テレビで「人間講座」という番組の講師（講座「数学の愛しかた」）をしています。ハンガリーの数学教育と偉大な数学者たちを紹介するシリーズです。自分が教育を受けたのは社会主義制度下であったけれども、教育は非常に優れていた。自分はその教育の成果でいま、存在していると思っており、そのことにハンガリー人としてのアイデンティティを感じます。

西川 社会主義時代のハンガリーの教育制度にも、いいところがたくさんあったということですか。

フランクル ハンガリーの教育制度は19世紀後半に確立されました。日本の明治維新と同じころですけれども、ひとつ独特なことがあります。学力コンテストを好んで実施することです。それも、大学入試の模擬テストのようなものではなく、本当に学問的で、楽しい面白い問題が出ていた。しかも、数学に限らず物理学でも生物学でも語学でも、いまま高校生を対象に毎年行なわれています。このコンテストを通して、自分は何に興味があるのか、何を一番やりたいのか、若いときに気づくことが多いです。

西川 オーストリア・ハンガリー帝国の中心地である中部欧州は、19世紀から20世紀にかけて文化的にも繁栄しました。

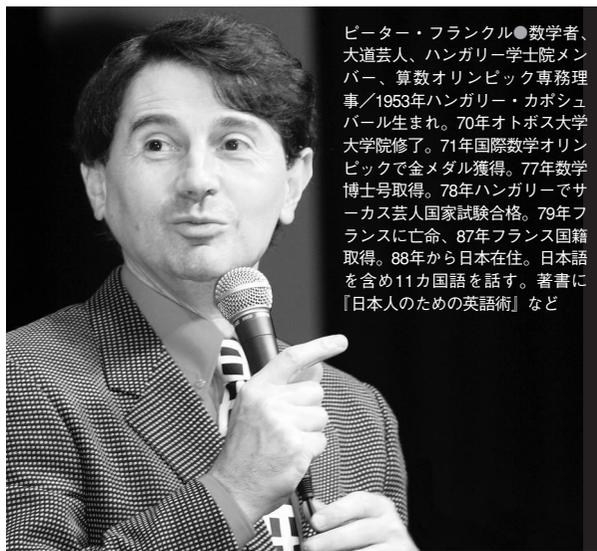
フランクル 19世紀の後半から第一次世界大戦までの50年間に、一番栄えました。心理学のフロイトをはじめ、哲学ではウィトゲンシュタインなど、すばらしい人をたくさん生み出した地域です。世界で初めてコンピュータを発明した数学者ジョン・フォン・ノイマンもそうで、いろいろな優秀な学者があのころ、ハンガリーで生まれました。

西川 残り一つのアイデンティティであるフランス国籍については、どうお考えですか。

フランクル 1979年にハンガリーからフランスへ亡命したとき、すでに大学を卒業して博士号をとった数学者でしたし、また舞台芸人の国家試験にも受かっていました。7カ国語を話せましたが、そのなかでフランスを選んだのは、やっぱりフランスの文化に非常に惹かれたからです。フランス文学を読み、詩を暗誦し、フランス映画を観たかった。

大道芸人として、初めて実際に路上でやったのもフランスでした。だから日本に来たころ、まだ誰もぼくのことを知らないから、大道芸をやるときには、ピーターをフランス語のピエールにして、フランス語で自己紹介をしたりとか、どこの人ですかと聞かれたら、いつもフランス人だと答えています。

フランスに亡命した当初、フランスのパスポートをすぐにはもらえないので、亡命者用パスポートを持っていました。それとは別に、実際には意味がない「EU市民」という、おもちゃのようなパスポートを買って持っていました（写真参照）。正式のパスポートではないけれども、あるところに100フランと自分の写真を送れば、そのパスポートが送られてきました。いまでも家にありますが、EUの旗と同じカラー



ピーター・フランクル●数学者、大道芸人、ハンガリー学士院メンバー、算数オリンピック専務理事/1953年ハンガリー・カボシュパール生まれ。70年オトボス大学大学院修了。71年国際数学オリンピックで金メダル獲得。77年数学博士号取得。78年ハンガリーでサーカス芸人国家試験合格。79年フランスに亡命、87年フランス国籍取得。88年から日本在住。日本語を含め11カ国語を話す。著書に「日本人のための英語術」など

クがついています。自分はやっぱりそのころからEU統合を強く望んでいたんですね。今年の5月1日、新たに10カ国が加盟したときに、ぼくはチェコのプラハからNHKのテレビ中継をやりましたが、大変感動しました。

アジアで出会った「親切」

西川 フランクルさんは、亡命してから1987年にフランス国籍をもらうまでの8年間、亡命者でした。EU域内から一歩外に出ようとすると、亡命者はビザをとるのが大変なんですよ。

フランクル そうです。アメリカとカナダはわりと簡単にビザをくれたけれども、日本は亡命者に対しては身元保証人がないとビザを出さない。インドなどもビザをもらうのに3カ月かかる。数学の国際会議に参加するにも、ビザがなかなか届かず、間に合わないんです。アフリカの場合もそう。ぼくの亡命者用のパスポート



「ヨーロッパ・アイデンティティ・カード」と記された非公式の“EU市民パスポート” (1984年発行)

を見て、アフリカの大使館は「これはダメです」と。

西川 門前払いをくうわけですね。この本のなかで印象深いところがあります。亡命者用パスポートでタイ経由でフランスに帰るとき、タイの空港から外に出られなくて36時間、待合室でずーっと過ごしたと。紙とペンさえあれば数学ができるから飽きなかったけれど、空港のブティック従業員がかわいそうに思って、朝ごはんや昼ごはんをただでくれたんですね。

フランクル あの親切には本当に感動しました。もともと、昔は日本人もたいへん親切でした。ぼくが日本に来たころ、道で「赤坂見附駅はどこですか」ときくと、

フランス人とかアメリカ人だったら「右」とか「まっすぐ行け」とか簡単に答えるだけですが、当時の日本人は「私もちょうど赤坂見附に行くところですよ」と言っていて、駅まで連れていってくれた。駅へ着くと、こちらが「もういいです」と言っても、「でも、券の買い方はわかりますか」と。「どこまで行くんですか」「渋谷です」「じゃ120円ですね」と買ってくれる。すごく親切でした。

西川 「当時は」ということは、いまは変わったということですか。

フランクル ええ、多少は。でも、地方へ行けば、いまでもとても親切です。

人見知りと人間関係づくり

西川 フランクルさんに私が感心するのは、人と人との関係のつくり方です。亡命してからは、いろいろな人に助けられたようですが、人間関係のつくり方には、どうい

★EU加盟5カ国

(2004年現在)

- ★アイルランド
- ★イギリス
- ★イタリア
- ★エストニア
- ★オランダ
- ★オーストリア
- ★キプロス
- ★ギリシャ
- ★スウェーデン
- ★スペイン
- ★スロバキア
- ★スロベニア
- ★チェコ
- ★デンマーク
- ★ドイツ
- ★ハンガリー
- ★フィンランド
- ★フランス
- ★ベルギー
- ★ポルトガル
- ★マルタ
- ★ラトビア
- ★リトアニア
- ★ルクセンブルク

(☆印は2004年5月新加盟国)



うコツがあるんですか。

フランクル これはある程度、遺伝ではないかと思っています。多くの父は人口5万人の街の医師をずっとやっています。朝、学校へ行くときには父と一緒に家を出ます、父の病院へ行く途中に多くの学校があるから。でも、学校まで一緒にとはほとんどなかった。

西川 どうしてですか。

フランクル 道の途中で誰かに、「あ、先生！」と声をかけられ、父は喜んで話をする。ぼくは急ぐから、いつも先に行きました。ぼくが父をすごく評価しているのは、お金とかそういうものには興味がなかった分、人にはすごい興味を持って

いて、どの患者とも何十分もゆっくり話をして、家庭事情なんかも聞いたたりして、患者の信頼を得ていたことです。

もつとも、ぼくは親の期待通りに医者になることはなかった。数学の世界は、どちらかというと結構さっぱりした世界なので、数学を通して人間関係はあまりつくれません。相手に数学の話をすれば、みんな逃げますね。でも、亡命するとやっぱり孤独だし、人間関係をつくらないと大変だから、できる限りいろんな人と友だち関係をつくらうと努めました。

西川 フランクルさんの本によると、「自分はシャイで、人見知りする性格」だとおっしゃっていますね。**フランクル** 本当にそのとおりなんです。だから、ぼくにとつては大道芸というツールが必要だった。

大道芸をやる人と人が自然に集まって、芸が終わるとちよつと声をかけてくれたり、何か質問してくれたりする。それだともちろんと話せるんだけど、最初に自分のほうから話しかけるのは、いままも苦手です。

西川 大道芸は、コミュニケーションの道具であり、入り口でもあるわけですね。もうひとつ感心するのは、パリのカフェで知り合った日本人と親しくなつて、日本にいるその人の友だちの電話番号を教えてもらう。そして日本に来ると電話して会う。そうやって友だちの輪を広げていますよね。

フランクル ヨーロッパの人はそうです。そして日本人よりも、人を自分の家と呼ぶのが好きです。だから、日本ではくが納得いかないのは、あまり家に呼んでくれないことです。



↑東京・渋谷の路上で大道芸を披露するフランクルさん

←フランクルさんの著書
 〈左〉『世界青春放浪記』（集英社文庫、2002年）
 〈右〉『僕が日本を選んだ理由』（集英社文庫、2003年）

西川 それは、家が狭いからじゃないですか。

フランクル そんなことないです。これは広さの問題ではなく、習慣の問題です。だから、人を家に呼ぶという習慣が日本の人にもうすこし身につけば、もっと楽しくなりますね。

人と人との壁が低い日本

西川 フランクルさんが日本に定住しようと思った理由は何ですか。

フランクル ひとつは、日本人が非常に丁寧に親切であることです。例えば店に入るときに「ごめんください」と声をかけ、店員も「いらっしやいませ」と言う。デパートでスーツを10着も試着して、結局買わなくても、店員は「どうもありがとうございますございました。またお越しくださいませ」と言う。だから、毎日の生活や仕事で日本では非常にやりやすいです。また、日本人とグループで仕事をする時、どこか一体感がわいてきて、メンバーがみんな一緒になってその仕事を成功させようとする。自分が調子がいいときには、ほかの人の仕事までやってあげたりする。つまり、人と人との壁、役割の壁があまり高くないんです。

西川 思いやりみたいなものですかね。

フランクル 仕事をする人にとって日本はなかなかいい国です。けれども仕事以外の部分は、まだヨーロッパに学ぶべきものは多々あると思います。

西川 例えば、どういうものでしょうか。

フランクル きちんと仕事をするという点で、ヨーロッパではすこし違います。例えばあるとき、ドイツのスーパーマーケットに午後6時58分に入ろうとした。閉店は7時ですが、大

男が立ち上がった。「もう閉店です」。「まだ7時になってないよ」と言うと、「これから商品を選び、レジでチェックアウトするまでに、必ず7時をまわります。だからダメです」。これは、ドイツだけではなくヨーロッパでは一般的な「社会的契約」なんです。多少は不便を感じるかもしれませんが。一方で、午後6時まで仕事だったら6時5分にはもう会社の外にいて、7時には友達と一緒にテニスなどを楽しんでいる。ところが日本では、労働基準法があっても無いのと同じで、よく「不払い残業」が多いといわれる。会社で過ごす時間が長すぎて、仕事関係以外の人と過ごす時間、自分の家族と一緒に出来る機会が少ない。バカンスだって非常に短く。フランスやドイツ、イタリアなどでは、必ず5〜6週間まとめて休暇をとれます。

西川 要するに暮らしを楽しむことを、もっとヨーロッパから学べという事なんじゃないでしょうか。例えばアメリカと日本と欧州を比べた場合はどうですか。

これからは「脱米入欧」

フランクル 第二次世界大戦で日本は負けてアメリカに占領されて、アメリカ追随になりました。しかし、19世紀の日本が掲げたスローガンは「脱亜入欧」。つまり、アジアのほかの後進国のようにならず、ヨーロッパの先進国のように

にしかわ めぐみ ● 毎日新聞専門編集委員 / 1947年長崎県生まれ。東京外国語大学中国語科卒。71年毎日新聞社入社、東京本社社会部、外信部、テヘラン特派員、パリ特派員、ローマ支局長、外信部長、論説委員を経て2002年から現職。1997年著書「エリゼ宮の食卓」でサントリー学芸賞受賞。このほかの著書に「国際政治のキーワード」など



なりましょう、と。これは当時、岩倉具視使節団が世界を回って出て出した結論です。まずアメリカに渡って、そしてイギリスに渡り、パリ・コミューン直後のフランスも訪れて、ドイツやベルギー、オランダを回り、膨大なリポートをまとめた。その結果、日本が選んだのは、決してアメリカのようになるのではなく、ヨーロッパのようになることでした。例

えば日本の法律や学校制度はドイツに学んだ。けれども、第二次大戦後はアメリカのようになると変わった。これをまた、そろそろ変える必要があるとぼくは思うんです。これから日本が掲げるべきスローガンは「脱米入欧」であると。

西川 それは、なぜですか。

フランクル 国土面積、天然資源、軍事力と、いろいろな面で日本とアメリカは正反対なんですね。一方、日本には古くから伝わる文化があり、国のサイズなどヨーロッパとの共通点が多い。もつとヨーロッパのいいところを学んで、そういう方向に日本が動くべきではないかと思っています。

日本は、いまもGDP（国内総生産）とか経済成長をいつも考えているし、新聞やテレビのニュースも経済のことがすごく多い。でもこれからは、日本の人たちは考え方を変えなければならぬと思います。自分たちが何を目標しているのか、どのように人生を楽しむのか、何を幸せと考えるのか、たくさん消費したから幸せになるというものではありません。

岩倉具視使節団が世界を回った経路図



家族や友人たちともつと一緒に時間を過ごす、森に行つて散歩したりする、そのようなことに幸せを求める意識の転換が必要だと思っています。そういう面では、ヨーロッパから学べるものはまだまだ多いと思います。

第五のアイデンティティは

西川 最後になりますが、ヨーロッパが日本に学ぶものというのは何でしょうか。
フランクル そうですね、ぼくが日本に来て非常にうれしく思ったことは、日本社会では宗教の要素が表舞台に出てこないことです。ぼくは無神論者ですが、日本には宗教の自由があつて、これは非常にいいと思っています。

もう一つは、日本人はケンカをうまくやりすごす。これはいいことです。例えば、東京の電車は非常に混んでいるけれど、あまり問題は起こらない。フランスの地下鉄では、ちよつと相手の足を踏んだだけでケンカになります。だから、無駄なケンカをしないという日本人の姿勢は、欧米人にとって学ぶべきことですね。

西川 いまは日本で暮らしておられるので、もしかしたら第五のものとして、日本というアイデンティティができるかもしれませんね。

フランクル 心の中ではだんだん、そうなっていくんじゃないかと思っています。